

2012年9月17日
0:16

宇宙人伝

洋戸蘭光

「ねえあなた、人を殺したいって思ったことある？」

安い煙草の煙が充満する店内で、安い煙草を口にくわえながら、その女は他愛ない冗談を口にするように、カウンター席の隣に座る男に向かって突然そう言った。

「ないね、生まれてから一度もないし、人を殺したことも一度もない。」

対称的に、その男は至って真面目な口調でそう返答し、

「僕はだって、」

と続けようとしたが、いったんそこで言葉をくぎり、手にしていたグラスに入った残り少ない酒を一

気に呷った。それが「だって」の言葉の続きをつむぐための大事な儀式であるかのように。

その二人がいるのは、古ぼけた酒屋だった。とはいうものの、飲食店にあるはずの清潔感は微塵もなく、壁も天井も煙草のヤニにまみれ、床は歩けば足跡がつくほどに埃が広がり、いつそこで朽ち果てたのかも分からない、大きな蛾の死骸がいくつも転がっていた。そんな店だから、見渡す限りまともな客は一人もおらず、薄汚い年老的な男や、逆に、厚化粧とブランド品を身にまとい酔いつぶれる女、テーブルの上に座りながら煙草を吸う学生等々。店の奥の棚には、如何にも高級そうな酒が申し訳程度に並んでいるが、こんな店ではその味もろくに楽し

めまい。ここに来る人間の目的は結局、酒の味ではなくこの退廃的な雰囲気なのだ。

「僕はだって、人間をこの上なく愛しているんだから。愛しているものを殺すわけがないだろう。」

そう声高らかに、といってもそれは女にしか聞こえない程度の音量だが、告げた男は、およそこの場に似つかわしいとは言い難い風体をしていた。短く切りそろえ、それ以外に一切の手を加えていない髪に、小奇麗な服装。もう少し若ければ、好青年という言葉がぴったりの風貌であろう。

「へえ、誰でも？」

さらに疑問を重ねたその女も、この店の中では、男と同様に場違いな存在だった。気取らない程度にめかし込み、長い髪を後ろでしばりつけている。そんなカジジュアルな身なりにも関わらず、どこか妖美さを感じさせる雰囲気は高貴な猫を連想させた。

「そう、誰でも。」

「ホントに？たとえば、この店で燻ってる連中も？」

女はそう言つて、背後のテーブル席でたむろしている客達の方へと目を向けた。

「ああ、当たり前だ。彼らの淀んだ、現実から逃避した生き方も、僕は好きだ。」

だからこの店を懇意にしているんだけどね。男は苦笑しながらそう付け加えた。

ふうん。と、女は何やら感心した様子で、再び男の方へと視線を戻す。

「じゃあ、イデオロギーも宗教も関係ないの？」

「ないね、厭世主義者も悪魔主義者も共産主義者も日和見主義者も軍国主義者もキリスト教徒もイスラム教徒も仏教徒もユダヤ教徒も独裁者も革命家も政治家も軍人も市民も僕には関係ない。みんな愛してる。」

男はどんどんと雄弁になっていく。傍から見れば、ただアルコールが回っているだけにも見えるが、男はまだ正気だ。酒もまだ一杯目だ。

また女の方も、男の奇怪にも思える言動に全く臆

した様子を見せない。

「へえ、それなら、」

そこで女は意地悪そうな、並の人間なら恐怖にも似た感情を抱いてしまう程に、本当に意地悪そうな笑みを浮かべ、

「人殺し、とかは？」

男の耳元で悪魔のように囁いた。

「大好きだよ。殺す側も好きだし。殺される側も好きだ。」

男は即答した。

迷うことなく即答した。

それだけじゃない。男は続ける。

騙す側も好きだし。騙される側も好きだ。

奪う側も好きだし。奪われる側も好きだ。

蹴る側も好きだし。蹴られる側も好きだ。

「そうそう、僕が学生の頃クラスでいじめがあつてね、その時クラスにいた人間は、人間達は四つに分かれたんだよ。」

一つは、悪意を、愉悅を、胸に抱いていじめる側。

二つは、いじめられる側。

三つは、関わり自体を恐れて傍観する側。

四つは、いじめる側にへつらい、弱者をいじめる側。

あいにく、いじめを止める側はいなかったけどね。

でも僕はクラスの人間をみんな愛していたし、人間達を憎いと思ったことなんて一度もなかったよ。」

男の言葉は常軌を逸した内容であるにもかかわらず、疑問をはさむ余地がないほどに高い密度で編みこまれ、同時に、有無を言わさぬ絶対的な説得力を備えていた。

「じゃあ、あなたに嫌いなものはないの？」

しかし、女がそう尋ねた途端、絶え間なく続くと思われた男の弁に、ほんの一瞬だけ間が開いた。男は先ほどまでの上機嫌な表情から、再び最初の真面目な表情へと戻り、

「あるよ、僕は宇宙人が嫌いだ。」

あからさまに憎しみのこもった声で、吐き捨てるようにそう呟いた。

そしてその言葉を聞いた時、女の瞳にも僅かな怪訝の色が浮かんだ。しかしそれは、あまりに突拍子もない男の発言を訝しむというよりも、宇宙人という単語そのものに反応したようであった。女は男の方へと身乗り出す。

「その話、もう少し詳しく聞かせてよ。」

「この世界には宇宙人がいるんだよ。あいつらは僕たち人間を肉体的に、そして精神的に傷つけようとするんだ。許せないよね。」

「でも、人間だって同じことしてるじゃない。」

「いや、全然違う。だってあいつらは、」

その時、ビリリリリと甲高い音が突然鳴り響いた。女のズボンからだ。女は不機嫌そうにポケットの中に手をつっ込み、けたたましく着信を知らせ続ける携帯電話を取り出し、通話ボタンを押して、耳に当てた。そして二つ三つ電話の相手と、男にも聞こえ

ないほど小さな声で言葉を交わすと、ちっと舌打ちして携帯を切った。

「ごめんなさいね。同僚から仕事の件で文句がきて、ちよっと行かなきゃいけなくなっちゃった。」

「別に構わないよ。」

「そう、楽しい話をありがと。話の続き、今度会ったら聞かせてね。」

「ああ、もちろんだとも。」

「ねえ、私思っただけどさ、」

「何だい？」

「私達って、きつと似た者同士よ。」

女はそう言っただけで立ち上がり、さっきまで携帯電話が入っていた方と逆のポケットから、一万円札を取り出した。そのお札を、近くで客に混じって煙草を吸っていた店員に手渡し、

「これで、彼の分もお願ひ。」

そう告げると、男の方が「いや、別にそこまで」と言おうとする前に、足早に店を飛び出して行って

しまった。

後には男と、女がさつきまで吸っていた煙草の吸殻だけが残された。

男の毎日の責務は大手掲示板のチェックである。

特に積極的に閲覧するのは、アンチ板と呼ばれる掲示板。そこには、誰かに憎しみを抱くもの、妬みを抱くもの、ただ日常のうっぶんを晴らしたいだけのもの、そして、『宇宙人達』がわらわらと集っている。男は膨大な真偽のつかぬ書き込みの中から、ある特定の傾向を持った書き込みだけをひたすらに探し求める。宇宙人の書き込みを。そして男は、あるⅢにターゲットを絞った。長年の経験から、書き込みの内容を見ただけで男はそのⅢ主が九割九分宇宙人であることを確信する。だが、絶対ではない。もし相手が愛すべき人間だったならば。そう考えると早とちりするわけにはいかない。男はⅢの相手

がどんな奴かを確かめることにする。

遠く離れた場所にいるはずの相手を、である。

男はそのための手段を有していた。別に難しいことではない。自分と相手はネットワークを通じて繋がっているのだ。繋がりがさえあれば、それをたどって相手の元へとたどり着くことが出来る。たどり着くすが自分が自分にはある。そう何の疑いもなく男は考える。

男は目をつむり、自分の認識を向上させた。

それは、より高次の存在の目線で世界を眺めるのと同じこと。

つまりは、神と同じ目線に立つのだ。

すると、形を持たないはずのネットワークが、可視的存在になる。それは三次元的に展開された複雑な地図のような形をしている。地図はどこどころ分断されたり、かと思ったら瞬時に接続されたりを休みなく繰り返す。自分の意識はその地図の上を自由に行き来することが出来るようになる。宇宙人の

ものと思われるIDを見つけ出す。そのIDからは地図の外に向かって一本の道が続いていた。男はその道をたどる。道の向こうからは時折、記号の羅列のようなものが飛んでくる。男はそれが、ID主のパソコンから掲示板へと送り出された言語であると理解している。記号の発信源へと向けて、意識を加速させる。ほんのわずかな時間で、ID主のパソコンまでたどり着いた。パソコンの中は理路整然とした倉庫のような印象を男にもたらす。さらにパソコンの内部から、男の意識は外部へと、つまりID主の部屋へと飛び出した。男の意識は、パソコンとネットワークとを媒介にして、ID主の部屋へと繋がっていた。部屋には若い男が一人。そいつは自分が見られているともつゆ知らず、ひたすらにキーボードを打ち続けている。

見た目はただの人間と大差ないが、その内面はいつたいようだか。

宇宙人か、それとも否か。

男はさらに認識を向上させた。

相手の脳から大量の、煩雑でありながら、整然としている情報群が顕然する。

それらは、一般に心と呼ばれているものだ。心が可視化したのだ。

男はその情報、つまりはID主の感情の中から、そいつが宇宙人である証拠を探す。

証拠といっても、別に大層なものではない。

宇宙人は人間を傷つけるとき、必ずある感情を抱くのだ。

それを見つめるだけでいい。

錯綜する情報の海を泳ぐ。奇妙なことにID主からは、怒り、憎しみ、妬み、そういった負の感情が一切感じられない。それはとても奇妙なことであった。ただし、ID主がただの人間だとしたら、の話だ

が。
その時、視界の脇をすつと通り過ぎた情報。男はそれを見逃さない。その情報を目で追い、マークす

独裁者は国が欲しいから権力を集め、

人殺しは相手を殺したいから人を殺す、

じゃあ、そいつらは何のために××する？

そして、そいつらのたどり着く結論はいつも同じ。

『何となく』だ。

なんだそれは。

差別も偏見もないところから生まれる、暴力？

男にはそれが理解しえなかった。

全ての行動を神の意志とする狂信者でさえも、た

だ選択肢を制限しているだけ。

たった一つの選択肢の中から、狂信者達は結局”

選択”しているのだ。

だから、狂信者とそいつらは違う。

そいつらは何も考えず、何も選択していないのだ

から。

だが、何も考えていないにもかかわらず、そいつ

らは人を傷つける。

何も考えないイコール何もしない、ではないの

か？

では、彼らの行動の根源はなんだ？

本能か？

ホップズの論を思い出し、すぐさま否定する。

無意味な暴力が本能によって起こるはずがない。

それが自分の考えだ。

古来より、人間同士の争い(それは戦争という大規

模なものから、いじめ、またはネット上での他者批

判であつたりする)は理由があつたはずだ。

格差、宗教、イデオロギー、エトセトラエトセト

ラ、

また、戦場の兵士にとっては、それは上官からの

命令であつたかもしれない。

理由なき争いは人間のすることではない。

つまり、理由なき争いをする奴らは人間ではない

のだ。

そう、愛すべき人間の中に、こんな奴らがいるは

ずない。

いてはいけない。

だから再び言おう、奴らは人間ではないと。

そして、人間でないのなら、

それは宇宙人だろう。

宇宙人はいつも言う。

『何となく』と。

とても恐ろしい言葉だ。

その言葉を作り出したのは、まさしく宇宙人本人ではなからうか。

そう疑うほどに。

このままでは宇宙人は、自分が愛する人間達をいつまでも傷つけ続けるだろう。

だからその前に、

あの学生の中に紛れ込んでいた宇宙人の時と同じように、

殺さなくては。

そう、宇宙人は、死ななくてはいけないのだ。

今日の標的として定めた宇宙人の潜伏先は、思っていた程に遠くはなかった。電車を二本乗り継ぎ、駅から歩いて十五分。男は宇宙人の脳から得た情報を頼りに、迷うことなくその潜伏先へと到着した。そこは十二階建ての、ごくありふれたマンションだった。

別に珍しい話でもない、宇宙人のすみかなんて皆こんなものだ。

男はその鉄筋コンクリートで組み上げられた、巨人めいた建物を見上げる。もう夜は遅く、明かりのついてる部屋はごくわずかだ。道路には街灯もありない。それでも周囲があまり暗く感じられないのは、今日が月の最も輝く日だからであろうか。

マンションの五階で、明かりがついている部屋は一つだけだった。

そして宇宙人の潜伏先がその部屋であることを、男は理解していた。

ここまでくれば後は簡単だ。壁をつたって五階へとよじ登り、窓を拳で突き破る。宇宙人はおそらく今も掲示板への書き込みをしているだろう。部屋に突入したら間髪入れずに、その宇宙人の顔を目の前のキーボードに叩き付け、そのまま肘で延髄を叩き割ればいい。後には呆然と目を見開き絶命した宇宙人と、粉々に砕けたキーボード、そして奇妙な達成感が残るだろう。

ん？

奇妙な達成感？

いったいそれは何なのだろう？

男はそれを、生まれて初めて宇宙人を殺した時から感じていた。

最初は、宇宙人を殺したことに對して歓喜と愉悅を感じているのかと思っただが、さらに宇宙人を殺し続けるうちに、どうもそれは違うように感じてきた。それは、誰かから期待されている事をその通りに成し遂げた時の感情に似ている。

誰かに期待されている？

誰に？

首を横に振る。そんな疑問符だらけの思考など、今はどうでもいい。

そして、男はそれ以上その問題について考えるのをやめた。

宇宙人を殺す、そのことだけを考えるよう意識しながら、男はマンシヨンの壁の前まで近寄る。一度息を吸い、そして吐く。自分の腕と指に意識を集める。全身の血液がそこに集まるような感覚。熱い。だが、苦痛ではない。むしろ感じるのは、満ちる力。一度こぶしを握り、そして開く。いける、男はそう確信する。マンシヨンの壁のわずかな窪みに指をかける。そして懸垂の要領で体を持ち上げようとして、キュキュキュッ

背後から奇妙な音がした。

同時に、背中を蹴飛ばされたような気がした。

思わぬ衝撃により窪みから指が外れ、地面にしり

もちをつく。

臀部に鈍い痛みを感じ、遅れて今度は背中に焼けるような痛みを感じた。

「っ、く。」

何が起きたのか、思わず背中を触って確かめようとしたが、腕が思うように動かない。先ほどまでは、あれほど力に溢れていたはずなのに。

尻餅をついた態勢から起き上がることも出来ず、また、力の入らない背中はその体を支えきることも出来ず、男はそのままおむけに地面に倒れた。背中と地面がぶつかり、さらなる痛み、ぐう、と男はうめき声をあげる。男の視界は上を向いている。目の前に広がるのは雲一つない星空と、倒れる前よりもその高さを増したように感じるマンション、そして、五階で唯一明かりのついている、あの部屋だ。すると、自分の視界の上端に、ゆらりと一つ、人影が現れた。

儚く、けれども妖艶に光る月を背後に、一人女が

立っていた。

口には安い煙草を咥え、異様な形をした何かをその手に構え、

思わず男の喉から声が漏れる。

「あ、あなた、は、」

「ごめんなさいね、私、差別主義者なの。」

女は無感動な声でそう言った。

キュキュキュッ

再び異音。そして新たな苦痛。しかし、それも長くは続かず、体中を苛む痛みは次第に倦怠感へと置き換わっていく。何が起きたのか、なぜ自分は倒れているのか、それを考えるのもおっくうになっていく。ねっとりとした比重の重い液体に、ゆつくりと沈んでいく感覚。星空、マンション、五階の明かり、満月、そして女、全ての輪郭がぼやけて、そして次第に夜の闇よりも深い闇が視界を侵食する。

自分は死ぬんだ。男がまさに生と死の境界線上で理解できたのは、それだけだった。

「ぼく、は、」

男の口から言葉が漏れる、が、男自身にはもう意識はほとんどない。自分が何を言っているのか理解していない。ただ、生の最期に絞り出される肺腑に残っていた空気を、無意識に言葉に変換しているに過ぎない。

「あ、なた、を、あ、いし、」

そこまで言ったところで、男の言葉、呼吸、生命、全てが同時に途切れた。

サイレンサー付の自動拳銃をホルスターにしまいながら、彼女は今仕留め終えたばかりの宇宙人を見下ろした。

酒場で会った時と同じ髪型、同じ服装。ただその異様に膨らみ、そして膨らんだまま硬直した指と腕の筋肉だけが、あの時と異なっていた。

その男は宇宙人だった、とは言っても本人にもそ

の自覚はなかっただろうが。

だがそれでも、宇宙人が実在していることは事実だ。

宇宙人はこの地球上で最初は人間として生を受け、人間として成長する。彼らに変化が訪れるのは人間という第二次成長期のあたりからだ。まず彼らは、自分の感覚と肉体を変異させる事が出来るようになる。普段の彼らは人間と変わらない。しかし、彼らは自身の筋肉を一瞬で、人間離れたものへと変えることが出来るのだ。ちょうどこの宇宙人の腕と指のように。そしてもう一つ。彼らの感覚は人間のそれを超越出来る。にわかには信じがたいが、彼らは自分の意識を、通信機器を媒介にして世界中に飛ばすことが出来、また、人間の心の中も覗くことが出来るらしい。昔一度だけ、調査班の人間から詳しい理論を説明されたことがあるが、あまりにも概念が抽象的すぎて、女にはさっぱり理解できなかった。まあ、説明している側も本当に理解していたのかど

うか怪しいものだが。

だが、彼らが真に宇宙人と呼ばれる所以は別にあり、

それは彼らが、あらかじめ人間を殺すことを脳にプログラムされて生まれてくるという点だ。彼らは人生の中で何らかの理由で人を殺す。いや、殺し続ける。その理由は快楽であったり、憎しみであったり、主義であったりする、と思い込んでいる。彼らは自分の殺人衝動が自分の意志を超越したところからやってくることに気付かない。さらに不思議なことに、己の肉体や精神が他人と比べて以上であることすら、彼らはなぜか気付かない。つまり、自分が宇宙人であることに気づかない。自分が人を殺すのは自分の意志によるものだと思い込んでいる。気付かずに生き、気付かずに殺し、

そしてたつた今、気付かずに殺された。

女は短くなった煙草の吸殻を、地面に捨てた。宇宙人が作った血だまりの中に煙草は落ちて、ジュッ

と短く音をたて、赤黒く染まっていた。

宇宙人の血も、人間とものと変わらない色をして

いた。

ピリリリリ
また電話だ。今度は電話に出る前に舌打ちして、通話ボタンを押す。

「おい、終わったなら早く立ち去れ。」

聞こえてくるのはどこか遠くからここを監視しているのであろう同僚の声。

「分かっているわよ。それより、この宇宙人は今回誰を殺そうとしてたの？」

「ああ？そんなの断定は出来ないって。そいつの殺人傾向の対象に当てはまる人間なんて、そのマンシヨンの住人だけでも何人もいるだろうからな。もしくは、そいつら全員を殺そうとしていたか、どっちでもいいよ。」

「誰が、こいつにとつての宇宙人、だったのかしらね。」

「全員だろ。地球人はこいつらからしたら皆、宇宙人だ。」

「そういう意味じゃないわよ。」

女はそう吐き捨てて、携帯を切った。

そういう意味じゃない。こいつが愛していたのは結局、人間そのものではなかったのだ。こいつが愛していたのは人間の生きるという行為。それも、『選択する』という人間の生き方。それに恋焦がれていたら過ぎない。だから、『何も考えない』という人間の愚かしさを、決してこいつは認めることが出来なかった。認めることが出来ないから、こいつはその愚かしい人間を『宇宙人』として切り捨てた。そして、自分の脳が命じる殺人の標的を、全て宇宙人に押し付ける。こうして、人類愛と殺人の矛盾する行為を両立させた。

だが、人間側にとっては、こいつこそが宇宙人だったのだ。

生まれながらにして人間を殺すことを宿命づけら

れた種族。

自分たち人間もそれらを、『宇宙人』と呼び、そして切り捨ててきた。

そういった意味では、結局自分たちもこの宇宙人と同類なのだろう。

宇宙人と人間は決して手を取り合うことが出来ない。手を取り合うことが出来ないからこそ、宇宙人と人間という区別が生まれるのだ。

宇宙人ならば、殺すしかない。

なぜなら宇宙人は人間を殺すから。

人間だって、人間を殺す。その事実が棚に上げられたままにして。

女は思う。

だから自分は差別主義者なのだ。

自分は徹底した偏見に基づいて、これからも『宇宙人』を殺し続けるのだ。

「そう、あんた達宇宙人は、死ななきゃいけないのよ。」

自分に言い聞かせるように、女は呟く。

女はその場を後にした。どうせ後始末は処理班が
やってくれる。

後には宇宙人と、女がさつきまで吸っていた煙草
の吸殻だけが残された。